ザビエルと豊後

五野井　隆　史

はじめに

ザビエルの日本滞在は二年三箇月に及んだが、豊後府内滞在は一五五一年九月中旬から十一月十五日までの僅か二箇月間ほどにすぎなかった。この短い滞在期間中に、ザビエルは府内にあってどのように時間を過ごしたのであろうか。何を思い、日本宣教の将来についてどのように考えていたのであろうか。先ず初めに、ザビエルが府内にあって思い巡らし実行したことについて検討し、その中で特にザビエルと大友義鎮との関わりについて述べようと思う。次いで、ザビエルが日本での経験を踏まえて将来における宣教事業推進のためにどのような人物が日本に相応しく必要であると考えたのか、彼が考える宣教師像というものを描き出し、果たして彼の後に続いてやって来た宣教師達がザビエルの要求した条件に適う者たちであったのか、少しく言及したい。そして、府内において始まったキリシタン教界がどのような様相をもって進展していったのか、豊後における初期布教について概観し、最後に豊後の地から輩出した宣教師や同宿(伝道士)についても言及したいと思う。

一、ザビエルの府内滞在を中心にして

ザビエルが府内に来るきっかけになったのは、ポルトガル商船が日出の港に入ったことである。鹿児島到着以来二年この方、マラッカとゴアからの通信を待望していたからである。ポルトガル船の日出来着は一五五一年八月末(天文二十年七月末)のこ

とであった。ザビエルが滞在していた山口から府内に来るまでのことは、当時ポルトガル船に同乗していたポルトガル商人フェルナン・メンデス・ピントの著書『回航記 Peregrinação』に詳しく書かれている。[1] のちイエズス会のジョアン・ロドリゲス・ツーズはその著書『日本教会史』において、メンデス・ピントの記事について批判しているが、[2] これは彼のザビエルについての記事をまったく無視することができなかったことを示唆している。

メンデス・ピントの記すところによると、豊後から山口に戻った商人を通じてポルトガル船の来着を知ったザビエルは、九月一日商船の来着を確認し、商船がどこから来て、何時出帆するかなどについて質すため、また商人や船員達の告解(赦しの秘蹟)のため同地へ赴く用意のあることを伝えた手紙を書いて、キリシタンのマテウスに託し日出港に停泊中の商船に彼を遣わした。その一方で、平戸にとどまって宣教に従事していたコスメ・デ・トルレス神父に山口へ来るよう伝言を送った。マテウスが船長ドゥアルテ・ダ・ガマや商人達の手紙を持って山口へ戻ったのは、九月十日頃であった。ほぼ時を同じくしてトルレス神父も山口に到着した。大友義鎮の招聘状がザビエルの許に届いたのは、それからまもなくのことであった。ポルトガル人からザビエルのことについて聞き知った大友義鎮は、「あるいくつかの事柄について話す必要があるので、自分がいる所に来てくれるよう」ザビエルの来訪を求めた。[3] ザビエルは「もしかして彼がキリスト教徒になりたいと思っているか〔どうか〕を見極めるため、またポルトガル人達に会うために」[4]、九月十五日に山口を発って日出港に向かった。彼は出発前に、トルレス神父とジョアン・フェルナンデス修道士に指図を与えて五〇〇人余りいた山口のキリシタンについての世話を託すと共に、僧侶や知識人等との対話(宗論)についてその内容を詳細に書き留めておくよう助言を与えた。彼は、この豊後訪問を機会に同地において教えを説き、新しい葡萄畑を耕そうとしていたために、ポルトガル船が出帆する十一月以降も何箇月間か府内に止まることを考えていたようである。トルレスが平戸から山口に呼ばれたのは、そのための布石であったと見ることができる。

メンデス・ピントの記載によると、日出から山口までの道中は五日路であり、ザビエルの日出到着は九月二十日頃であったように思われる。彼はこの豊後への旅行にいくつかの目的を持っていた。(一)マラッカとゴアの同僚達からの通信・報告を入手

すること、㈡ポルトガル商人や船員達の告解を聴き聖体の秘蹟を授けること、㈢大友義鎮に面謁して布教の保護を得、キリシタン教会を作ること、そして義鎮の改宗の可能性を探ること、㈣山口における教会建設のための資金を捻出すること、㈤大内氏の城下町山口の外港としての貿易港を同地に近い豊後に確保して商館設置の可能性を探ること、などであった。

日出の港に着いたザビエルは、待ち望んでいた通信や報告がマラッカとゴアから届いていないことを知ってひどく落胆すると同時に、インドにおいて何らかの変事が起こったのではないかと不安に駆られたのであろうと推測される。彼はゴアの聖信(聖パウロ)学院の院長アントニオ・ゴメスやモルッカの上長ジョアン・デ・ベイラに対して、自分宛の書翰の回送と、各地の宣教報告及び重要問題についての報告を日本へ送るよう命じていたからである。このため、彼は急拠日本を去って、ひと先ずゴアに戻ることを決断せざるを得なかったようである。彼は早速その旨を山口のトルレスに伝え、日本に戻るまでの留守中の用務について書き送って、あれこれ指示するところがあった。

しかし、山口では九月二十三日頃に大内義隆の重臣陶隆房の謀叛の噂が市中に流れ、戦乱の発生を予測したトルレスは同二十八日に教会の聖具や所持品を安全な場所に匿し、義隆の重臣の一人内藤興盛の屋敷に避難した。義隆が山口を逃れ、長門国深川の大寧寺で自害したのは、その二日後の九月三十日のことであった。この争乱と大内義隆の死については、トルレスとフェルナンデスが同じ日付でザビエルに送付した一五五一年十月二十日付の書翰において言及されているが、アンジロウの元従僕アントニオがこれらの書翰をザビエルに齎した。トルレスはその時点で大友義鎮の弟晴英(はるふさ)が大内家を継ぐようになることをまだ知らなかったようであり、彼はザビエルに伝えて、「私達は当地の領主(重臣)達と話し、もしも彼らが国王によって与えられた許可を私達に確認しようとするならば、家あるいはこれを建てるための敷地を私達に与えてくれるよう求めるでしょう。彼等がこのことを望まなければ、国王が当国に現われるまで、そして尊師がインドから戻られるまで、この間、私は〔内田〕トメの家にいようと決めています」[5]と報じている。

ザビエルが大友義鎮を大友御屋敷に訪ねたのは、彼が日出港に着いてから数日後のことであったろう。最初の訪問の際には

船長のドゥアルテ・ダ・ガマとポルトガル商人達が彼に随行した。メンデス・ピントも当然随行者の一人であったであろう。彼の記載によると、ザビエルは義鎮が遣わした輿を拒わって、ポルトガル人三〇人と彼等の従僕三〇人からなる一行と共に府内の波止場から徒歩で宮殿(大友御屋敷)に向かったとのことであるが、[6] ジョアン・ロドリゲスはこのことについてはピントが誇大に描写していると批判的である。[7] しかし、ザビエルが日出港に到着した時、ポルトガル人達が彼の来着を喜んで船に搭載の大砲を放って祝ったことは、彼に対する厚い敬愛の念から十分にあり得たことであったと思われる。特に、船長ガマは一五四四年から一五四七年までインドのコウラン(通称キーロン)の要塞長官として在任中からザビエルとは知己であり、それ以降もマラッカを拠点にシナ・日本貿易に従事していたので、一五四五年からマラッカを中心に宣教に従事していたザビエルに対する信頼と崇敬は絶大なものがあり、そのために、イエズス会、中でも日本在住のイエズス会員に対する物的援助を惜しむことはなかった。

大友義鎮は、船長ガマやメンデス・ピント等ポルトガル商人達のザビエルに寄せる敬愛の念の深さを見て、救いの道を説く人がどんなに尊敬されているかを痛感したのではないかと推測される。義鎮は武将であり政治家であるのみならず、篤信の人、信仰の人でもあったからである。彼が禅宗に熱心に帰依していたことを知っていたジョアン・ロドリゲスは、彼とキリスト教との関わりについて言及して、「彼はザビエルの説くことに熱心に耳を傾け、しばしばそれに関していくつかの疑問を出したが、ザビエルはどの疑問にも解答を与えた。そのために彼はデウスの御法に非常に好感を抱くようになり、御法に説かれることに大いに満足して、その教えを深く理解した。しかし、デウスが彼を招き給うべき時期はまだ到達しておらず、年も若く御法を受け入れる準備ができていなかった」と述べ、さらに後になって聖なる洗礼を受けようと望んだ時、彼自身が「彼の領国で初めてデウスの御法が説かれた時から、その御法は彼の心によくかなっていたし、心の中では常に正しく聖なるものであると思っていたことはまちがいない」と述懐していた、[8] と述べている。義鎮はザビエルに会ってから二七年後の一五七八年八月二十八日に洗礼を受けたが、すでに四九歳になっていた。彼はザビエルの聖性と徳性を高く評価していたために、ザビエルと

同じフランシスコの洗礼名を自ら望んだが、その際に他のキリシタン大名のようにドンDomの敬称を自分の洗礼名の前に付け加えることは望まなかった、[9]とロドリゲスは指摘している。

ザビエルは義鎮に彼の領内における布教許可を求めて許された。ザビエル研究の第一人者であったシュールハンマー師によると、義鎮はポルトガル船が停泊していた沖の浜にザビエルのために住居をしつらえた。ザビエルは同所でポルトガル人達の教化に努め、沖の浜の周辺に住む人々に教えを説き若干名の改宗者を得た。ブラスはその中の一人であり、妻と兄弟及び下僕達と共に洗礼を受け、また高い地位の仏僧の姉妹一人も改宗した。[10]

大友義鎮はザビエルを初めて引見した時、彼を府内に招いた理由を明らかにしたと思われる。彼がザビエルに話したいと思っていたいくつかのこととは、一体どのような事柄であったのかということである。その一つは、ポルトガル船が毎年豊後に渡航するよう船長達に勧めてくれるようザビエルの斡旋を求めたことであった、と思われる。そして他の一つは、ポルトガル船の豊後渡航を定期化するためにインド副王に斡旋を依頼すべく、大友氏の使者をインドに派遣することを打診したのではないか、ということである。ザビエルは彼の申し出に好意的に対応したと思われる。山口を宣教活動の拠点と考えていたザビエルには、山口に近い海港、即ち豊後の港にポルトガル船が定期的に毎年来航することは、宣教師の渡航と教会のための必需品確保という点から不可欠であると考えられていたであろう。彼は鹿児島から発信したマラッカ長官ドン・ペドロ・ダ・シルヴァ宛一五四九年十一月五日付の書翰において、京都から陸路二日の堺に商館を設立することを提案していた。彼は神の愛だけのために船を日本に派遣する者はほとんどいないと思われるために商館を設ければポルトガル国王のためにもなり、商船が毎年来航するようになる、と考えていた。そのため、彼は日本でどのような商品が喜ばれ取引されるか、その商品目録を作成して送ることを、ゴアの聖信学院長ゴメスに同じ日付の書翰で報じている。[11]京都での宣教活動が行われるようになれば、日本第一の港町堺にポルトガル船が入港するようになる、とザビエルは考えていたのであろう。彼は恐らく堺を京都の外港として位置づけていたように思われる。しかし、荒廃した京都での宣教を断念した時、堺商館設立の計画も立消えてしまったと言えよう。

従って、彼は山口が宣教活動の中心となった時点で、インドからの人的・物的補給路確保という見地から、どの地が山口の外港として適地であるか、思案していたものと思われる。このため、彼はポルトガル船が豊後日出に入港したことを知り同地に赴いた時、日出港、さらに沖の島を山口の外港として考えるようになったのではないかと思われることである。商船が定期的に来航するようになれば、ポルトガル人の商館設立の道も自ら開かれるようになると考えていたのであろう。

大友義鎮が、ポルトガル船の定期的来航を確実にするためにインド副王に使者を派遣したい旨ザビエルに表明した時、ザビエルが喜んでこれに賛意を示したであろうことは容易に想像することができる。彼は前述のマラッカ長官宛の書翰において、インド副王と日本の国王との交流について言及し、日本の国王がゴアの偉大さと日本に不足する物を確認するために使者をインドに遣わすように尽力したい[12]、と述べている。彼はすでに鹿児島滞在中に僧侶二人を含む四人をマラッカに送っていた。三人は帰国したが、一人はゴアに行く予定でマラッカに残っていた[13]。義鎮が使節派遣を表明したことは、ザビエルには願ってもないことであったと思われる[14]。

山口における争乱と大内義隆の訃報が義鎮の許に齎されたのは、ザビエルが彼を初めて訪問してからまもなくのことであったろう。ザビエルが何時、どのような形で山口の凶報について知ったのかは明確でない。しかし、トルレスとフェルナンデスが十月二十日付の書翰において彼に争乱について報じる以前に、争乱の概しと義隆の死について何らかの形で伝えられていたのであろうと推測される。山口における陶隆房の謀叛を予め知っていた義鎮は、山口の争乱が終息したあとでその間の事情をある程度はザビエルに知らせ、弟晴英が大内家の後継者となることを語ったのではないかと思われる。彼はインドに戻ってすぐに書いた一五五二年一月二九日付の書翰において山口の後継者問題に言及して、

この豊後の太守はポルトガル人達と私に対して、山口の太守である弟がパードレ・コスモ・デ・トルレスとジョアン・フェルナンデスを厚くもてなして保護するよう取り計らうと約束しました。同様に、彼の弟も山口に着いた時にはそのことを実行すると私達に約束しました[15]、

と述べて、山口の宣教における不安が取り除かれたことを明らかにしている。

ザビエルが府内滞在中に尽力したことの一つは、山口の教会、即ち大道寺建造のための資金を調達することであった。大内義隆が彼に与えた一寺院は当時は無住の廃寺で、その敷地にコレジオ(学院)が建つほど広大なものであった。[16] ジョアン・ロドリゲスは『日本教会史』では、「(義隆は)パードレ・フランシスコに対して、かつて坊主らの修道院であったところで、今は人の住んでいない非常に広い敷地を与え、その中にパードレたちの住む家と、彼らの信奉する御法を説き広める教会を建てさせた」[17] とも述べている。ザビエルが大内氏から拝領した廃寺は、教会として利用されるためには大改造が必要であったと推測される。荒れた古寺を教会用に改造するには多額の費用が必要とされた。しかし、それに宛てるための持合わせは、今後も継続する宣教活動を考えると十分ではなかったように思われる。彼はマラッカ出発時に、同地の長官ペドロ・ダ・シルヴァ・ダ・ガマから日本での生活費と活動費に宛てるため最良質の胡椒三〇バールを与えられていたし、一五五〇年夏にポルトガル船が平戸に来航した折、船長や商人達からの寄進もあったと思われることから、当面の生活に困ることはなかったとは言え、教会建造のために大金を出費する余力はなかったであろう。しかし、四箇月以上も古寺に住んでいたザビエルが財政事情が許すならば、これを改築するか、新しい教会を建てたいと願っていたことは確実である。日出港から戻ったマテウスが彼に齎した数通の書翰の中に、船長ガマなど旧知の者たちからの書翰があったことは、彼に大きな慰めと同時に希望を与えるものであったと言えよう。

そのような思いを抱きながら豊後にやって来たザビエルに援助を申し出る者がいた。商人のメンデス・ピントであり、教会建造費として三〇〇クルザドを彼に貸与した。[18] メンデス・ピントはマラッカにおいて彼のミサにしばしば与っていたこともあり、彼の聖性に触れて深い尊敬の念を抱いていた。[19] 日出港での再会を誰よりも喜んだ一人であったことは、三〇〇クルザドの大金を彼に何の保証もないのに貸与した事実によって知ることができる。ザビエルはこの大金を早速山口のトルレスの許に送り、彼に教会建築を委ねた。大友義鎮の実弟大友義長が先代の義隆同様にトルレスに布教を許し大道寺の建造を認める判物

（裁許状）を下付したのは、一五五二年九月十六日（天文二十一年八月二十八日）であった。翌年に大道寺が建造されたと言われる。江戸時代に作成された山口古図には「大道寺」の記載があり[20]、これはトルレス建造の大道寺に該当すると言われている。しかし、大道寺が何時建てられたのか、また教会と修院を兼ねた建物であったのか、別棟の建物であったのか、速断できない。ルイス・フロイスは『日本史』において、「パードレはそこに教会と修院（igreja e casas）を作り、同僚達と住んでいました。このようにして六年間が経ちました[21]」と述べている。一五五二年九月にゴアから府内に来着したイルマンのドゥアルテ・ダ・シルヴァは一五五五年九月二十日付の豊後発信の書翰の中に、前年の一五五四年十二月以降に山口のトルレスから来た書翰の一部を引用して、「修院（bruma casa）一軒を建てることを急いでいます。古い修院が完全に朽ちており、今や降雨によって私達の上に崩れ落ちてくる恐れがあるからです[22]」と記している。さらに日本人ロウレンソからの一五五五年九月十六日頃の書翰の内容を紹介して、幅六ブラサ、縦（奥行き）八・五ブラサの新しい修院が建って七月十六日に落成のミサが挙げられ、何日間も新しい教会（igreja）に関する説教があった[23]、と報じている。シルヴァの記載では、同一の建物を修院とも教会ともしている。トルレスの一五五七年十一月七日付の豊後府内発信の書翰には「一万人以上の住民がいた町は一時間で全焼してしまいました。……そして私が居住していた教会と修院も焼けてしまいました[24]」とあり、教会と修院が一五五六年に戦火により焼失したことが明らかになる。一五五六年七月に府内に来たインド管区副管区長メルシオール・ヌーネス・バレトも、一五五八年一月十日付の書翰において、「一年前に完成した教会と修院も焼け落ちました[25]」と報じている。以上の記載から考えられることは、ザビエルがメンデス・ピントから借り入れた三〇〇クルザドの一部は、古い寺を修院用に修改築するために用いられたのではなかろうか、そして修改築された修院は教会兼用であったのではないか、しかもこの古い修院が使用不能となった時点で、即ち一五五五年に新しい教会と修院が造られたのではないか、ということである。建物は幅一三・二メートル、奥行き一八・七メートルであり、明らかに教会建築の様式が採られたと思われるが、聖堂を備えた修院であったのではなかろうか。大道寺はポルトガル語では grande caminho de Ceo と説明されている。「天に通じる大なる道」「天への大なる道」「天道」の寺ということになる。トルレスらは大道寺

が焼失した二〇ないし三〇日後に、即ち一五五六年五月に府内に避難して、義鎮の保護を得た。

なお、大友義鎮はザビエルのゴア帰還に際して、一家臣をインド副王の許に遣わした。その使者の氏名については明らかでない。新井白石は著書『西洋紀聞』において、この使者を植田（正しくは稙田となる）入道玄佐とし天正十二年（一五八四）ローマへ赴き同地で死没したとしている。[26] ザビエルによると、義鎮はポルトガル国王ジョアン三世に書状を書き認めて、その臣下及び友人として自らを位置づけ、友好の印として武具一揃を贈った。[27] インド副王ドン・アフォンソ・デ・ノローニャは、ザビエルのインド帰還三日後の一五五二年一月二十七日付の国王宛書翰において、ザビエルが一人の日本人を伴って来たこと、その者が殿下宛の国王（大友義鎮）の書状と武器を齎したことを報じている。[28] 義鎮の使者はゴア到着後に聖信学院（聖パウロ学院）で洗礼を受け、インド副王ノローニャが彼の代父を勤めた。この当時、インド・バサインに赴任したイルマンのジル・バレトによると、彼は従者一、二名と共に受洗した。[29] 使者の洗礼名は、フロイスの『日本史』によると、ロウレンソ・ペレイラと称した。フロイスは「パードレ（ザビエル）は彼にロウレンソ・ペレイラの名を付けました。彼は今なお豊後に住んでいます」[30]と伝えている。ロンレンソ・ペレイラと彼の従者がザビエルから洗礼を授かったことは、フロイスの指摘によって確認される。ロウレンソ・ペレイラが一五八六年頃まで豊後（恐らく府内）に存命していたことも、フロイスが『日本史』の執筆を一五八三年秋に命じられて第I部を一五八六年三月までに完成させていたことによって確認される。ロウレンソ・ペレイラが洗礼を受けた時、フロイスは聖パウロ学院で修学中であったから、彼の洗礼式に参列していたと推測される。ロウレンソ・ペレイラは一五五四年に再び義鎮の使者となってゴアに至り、折り返しインド副王使節メンデス・ピント、イエズス会インド管区副管区長ヌーネス・バレトと共にゴアを発って一五五六年に府内に戻ったが、フロイスもゴアからマラッカまで同行していたため、彼が一五六三年に来日した後もロウレンソ・ペレイラの動静に強い関心を持ち続けていたことは否定できない。[31]

フランシスコ・ペレスの一五五五年一月二十一日付の書翰によると、ザビエルが中国に向けて一五五二年四月十七日にゴアを出発した時、その一行の中には日本人キリシタン五人がいた。[32] 一人はアンジロウの元従僕のアントニオで、彼はザビエルに

従ってジョアンと共に再びゴアを訪れていた。他の一人はロウレンソ・ペレイラであり、残りの三人は彼の従者であったであろう。ロウレンソ・ペレイラは六月六日にマラッカでザビエルに別れ、パードレのバルタザール・ガーゴ、イルマンのペドロ・アルカソヴァとドゥアルテ・ダ・シルヴァの一行と共に、鹿児島を経由して九月七日に府内に戻った。大友義鎮は、ガーゴ神父からインド副王が彼に贈った金属製の胸甲一領その他の品々を受領した。インド副王との間に友誼関係を結ぶことを願望していた義鎮は、先ずインドとの間に交流関係を持つことができたことで所期の目的を達成することはできたが、さらにポルトガル国王からの来翰を待ち望んでいたことは、ガーゴ神父がゴアに対して幾度か国王からの来翰について尋ねていることから知ることができる。

ザビエルは大友義鎮のキリスト教への改宗について、その可能性を探ろうとして府内に赴いたが、キリスト教の教理を説いて十分に納得させるまでには至らなかったようである。彼の領内での宣教活動を保証されただけにすぎなかったが、将来における宣教活動に対する保証も義鎮から与えられた、と見ることができよう。

二、日本における宣教師の条件

インド副王ノローニャは、ポルトガル国王ドン・ジョアン三世に書き送った一五五二年一月二十七日付の書翰で、ザビエルが日本から戻ったことに言及して、「彼はその土地と人びとについて満足して帰って来ました。そして、彼はその土地では豊かな成果が上げられるだろう、と考えています[39]」と報じている。この一節からは、ザビエルが日本の将来における宣教事業が大いに期待し得ることを副王や司教らに報告したことが知られる。それでは、ザビエルは大きな収穫が期待された日本宣教に従事する宣教師について、どのような人物が相応しいと考えていたのであろうか。

彼は鹿児島からゴアの同僚達に送付した一五四九年十一月五日付の所謂大書翰において、彼等のうち多数の者が二年以内に日本に来ることになるだろうと述べて、「深い謙遜を身につけるよう」求め、さらに続けて「この謙遜についてはすべての地

方で必要ですが、この地方(日本)ではあなた方が考えいるよりももっと必要とされます」[34]と指摘して、日本では謙遜がいかに大切であるかを強調している。

一方、同じ日付でゴアの学院長アントニオ・ゴメスに送った書翰では、ザビエルは自分が日本へ来るよう指名した人物を変更することのないよう要請し、日本渡航予定者のうち誰かが死去した時には適任者を選んで、二人の修道士を彼に同行させるよう指図し、次のように述べている。

彼等(修道士)は活動的であり、すべての賤しい事柄において肉体的に必要になることを行うために、深く信頼することの出来る人物でなければなりません。このため、彼等が十分に信頼のおける人物であることを、私は重ねてあなたにお願いします。なぜなら、この土地は驚くほど危険に満ちているからです。[35]

ザビエルが日本への渡航を命じたのは、フランドル出身のパードレ・ガスパール・バルゼオであり、その同行者としてのパードレ、バルタザール・ガーゴとドミンゴス・カルヴァリョの計三人であった。彼はこの三人に対する書翰において「私はあなた方が自分自身を助けてくれる内面的な徳と謙遜とを具えていることを知っていますので、あなた方が望んでいることを実現するために、あなた方の大きな功徳のために聖なる〔従順の〕誓願に従い、あなた方がこれを成し得るための肉体的状態にあるならば、あなた方に……私のいる日本へ来るよう命じます」[36]と述べて、彼等三人に強い信頼を寄せている。

すでに述べたザビエル自身の指摘から明らかなように、彼は短い鹿児島滞在を通じて、㈠宗教者としての謙遜を人並み以上に具えていること、㈡何よりも信頼に足る人物であることが必要であると考えていたようである。司祭に随行する修道士にも、特に信頼のおける人物が求められた。十一月五日の時点では鹿児島滞在は数箇月にすぎず、ザビエルはどのような宣教師が日本に必要であるのか、具体的なイメージをまだ描けずにいたのではないかと思われる。

しかし、二年九箇月振りにインドに戻ったザビエルには日本に赴く宣教師がどのような資質を備えているべきか、どのような人物が求められているかという点について、すでに確固たる具体像があった。とは言え、一五五二年一月二十九日付の総会

長ロヨラ宛書翰と、翌一月三十日付のポルトガル管区長シモン・ロドリゲス宛書翰は、ザビエルが日本で過ごした二年三箇月間がいかに苦難に満ちたものであったかということ、そして今後の日本宣教がいかに茨の多い道のりとなるかを予想させるものであった。

ザビエルが自らの経験を踏まえて結論に達した理想的な宣教師とは、おおよそ次のようなものであった。

㈠日本の諸大学に派遣されなければならないために、深い学識を具え、日本の学者達や学僧達と論争ができること。ザビエルは、イエズス会のパードレが日本の諸大学に派遣されるのは、日本人が自分達も学問や学者達を持っていると自負して、自らの誤謬を許容しているからである[37]、と指摘している。そして大学へ行った時には絶えず議論しなければならず、彼等の質問に答えるには学問が必要であるとし、哲学や弁証法について十分な修業を積んだ者であれば、坊主達を議論の上で当惑させ彼等の矛盾を指摘することができるだろう[38]、と見ている。従って、彼は哲学者、弁証法学者の来日をヨーロッパに強く求めたのである。しかも、彼等には豊富な学識も求められた。日本人が強い関心を持っていた球体に関する知識、天体の運行、日触、月の満ち欠け、雨水、雪、霰、雷鳴、稲妻、彗星及び諸々の自然現象についての知識を修めていることが要求された[39]。

㈡派遣されるべき人物は老人ではなく、また若者であっても経験を積んでいる者であること。彼はロヨラに対し、「最大の苦難は絶え間ない明らかな死の危険にさらされている」ことと伝え、「労苦がたくさんあるために、この地は老人達には向いていませんし、また若者にとっても、大いに経験を積んでいる者の他には、余り適していません。なぜなら、どのようにしても人のために役立つ代わりに、むしろ自分が滅びてしまうからです。ここはあらゆる種類の罪の温床地です。それらの罪を咎める人びと(パードレ)について、〔日本人達が〕見ているどのような些細なことによっても、人びとは傷ついてしまいます[40]」と報じている。彼はまたシモン・ロドリゲスにも同じ内容のことについて言及して、日本ではいかに多くの苦難が予測されるかという点について詳述し、「年配の者は体力を欠いているため相応しくなく、非常に若い者も体力はあっても経験が不足しているために適していません[41]」と明言している。

㈢ローマに巡礼し、総会長ロヨラに面会して審問を受け、ロヨラに是認された者であること。ザビエルはロヨラに対して、「あなたが［ポルトガルの］コインブラに命じて、日本へ派遣される予定の人びとは先ず初めにローマへ赴くように言って下さるなら、私は大いに慰められることでしょう」と報じ、またローマ巡礼を通じて彼等がよく験されて経験を積むことになる、[42]と述べている。この点については、同書翰ではザビエルの意図することが判然としないが、現在大分県立先哲史料館に展観中の一五五二年四月九日付のロヨラ宛書翰によって、彼の意図が明確になる。即ち、それは、ロヨラとある期間起居を共にすることによって、彼の訓導を受け、イエズス会の諸事情に精通し、経験を積むことによって上長としての統轄能力を兼ね備え、人間として大きく成長することを期待したからであった。[43]

㈣肉体的労苦と酷寒に堪えうる能力を有すること。即ち、フランドル人やドイツ人が適任であること。彼はロヨラへの書翰で、「日本へはスペイン語かポルトガル語ができるフランドル人やドイツ人が相応しいでしょう。なぜなら、彼等は様々な肉体的労苦に対し、また坂東の酷寒にも耐え得る能力があるからであり、こうした人びとはスペインやイタリアの学院にたくさんいると思うからです。彼等がスペインやイタリアにおいて説教するための言葉ができなくとも、日本では豊かな成果を挙げることができるからです」[44]と報じ、シモン・ロドリゲスには、「彼等は寒さの中で苦労して育てられているから」[45]と書いて、フランドル人やドイツ人の生活体験を評価し、彼等を日本宣教に活用しようとした。ザビエルは彼等の素質について述べ、「寒い土地に生活している人々は甚だ賢明で鋭敏」であり、「多くの困難に堪える素質があり、また彼等は寒気によく堪える」ために、北の方にある坂東の地に派遣されても堪えることができる、[46]と判断していた。

なお、ザビエルはロヨラに対して、特に高徳を具えた人物をローマから日本へ派遣してくれるよう依頼している。そのことは次のような文脈の中で述べられている。

日本の地はキリスト教界が定着するのに非常に適していますので、彼等（日本在住の宣教師）に降りかかる労苦はすべて十分に報いられます。従って、あなたが高徳の人物をそちらから日本へ派遣して下さることを、私は強く希望しております。

なぜなら、これらの地方(インド地方)で発見されたすべての国の中で日本の人びとだけがキリスト教界を永続させていけるにすぎないからです。たといこれが極めて大きな困難であるにちがいないとしてもです。[47]

高徳の人物派遣の要請は、宣教師全員を対象としたのではなく、日本宣教の責任者ないし上長としての適任者を求めてなされたものであった。つまるところ、ザビエルが来日する宣教師に求めた条件は、㈠徳性の優れた信頼のできる人物であること、㈡哲学、弁証学、自然科学を身につけていて学識の豊かなこと、㈢老人でないこと、㈣若くて経験を有すること、㈤健康で寒さに堪えることができる、というものであった。その中でも、彼が鹿児島到着以来一貫して主張していたのは徳性の問題であり、日本の上長になる人物に特に求められた資質であった。シモン・ロドリゲスへの二通の書翰で、この問題は特に強調されている。一五五二年一月三十日付の書翰では、坂東の足利学校やその他の大学(大寺院の学問所)に行く宣教師が仏僧等から必ず烈しい迫害を受けることを述べたのちに、「もしも厚く信頼できる人物でなければ、他の人びとの役に立つ代わりに、自らを破滅させることになるにちがいない」[48]と告げ、同年四月七日付の書翰においても、日本での苦難について語ったのち、「もしも日本へ赴くためそちら(ポルトガル)から来る者たちに、それほど多くの悪や苦難に抵抗するための無数の徳がなければ、彼等は自滅してしまうだろう、と私は怖れています」[49]と懸念を表明している。ザビエルには、いかに苛酷な迫害があるにせよ、人間として優れた徳があれば、自らを神に委ねることによってそれを克服できるとの強い信念があったように思われる。彼はまた、イエズス会創設以来の同僚であるポルトガル管区長シモン・ロドリゲスに、日本宣教がいかに困難に満ちたものであるか、そして彼が今まさに一つの苦しい決断を下そうとしていたことを徳性の問題に仮託して伝えようとしていたかのようにも思われる。ロドリゲスが推挙してゴアに遣わした学院長ゴメスの謙遜を欠いた傲岸な態度に対して、ひたすら謙遜の徳を求めていたザビエルは、ゴメスに対し「あなたが聖なる望みを実現するために都か坂東に来るように、いつの日かあなたに手紙を書くことを強く希望しています」と伝え、別の箇所でも「三年以内に私はあなたが当地の諸大学のどこかに住むために来るように、あなたに手紙を書くことになろうかと思います」[50]と書き送ったのは、鹿児島滞在中のことであった。説教者として高い

評判を得ていたゴメス神父は、そのために謙遜の徳を失い学院長としての的確な指導力をも欠いていたとされる。ザビエルは彼に上述のような自覚と自省を促す手紙を書いて、彼の立ち直りと宣教者としての再出発を期待していたことは否定できない。しかし、ゴアに帰還したザビエルは、中国への出発を前にして彼の学院長職を解いてゴアの北にあるディウへ送り、イエズス会から放逐する処置を取った。

ザビエルはまた、足利学校や大寺院の学問所に派遣する宣教師には第一級の学識者を宛てようと考えていた。彼はインド帰還後すぐにロヨラに書き送った一五五二年一月二十九日付の書翰において、日本とインドに派遣する宣教師の条件及び素質について言及したのちに、山口にいるトルレス神父や新たに派遣されるバルタザール・ガーゴ神父等を念頭において、次のような一節を書いている。

> 山口に滞在している会員や、目下当地にいる者のうち、今年〔日本へ〕赴く会員や、同様に神の思召しによって将来他の会員達が行くことについて、彼等がこれらの諸大学に派遣されるのが相応しいとは私は考えていません。彼等は言葉(日本語)や〔日本の〕諸宗派に関することを学び、パードレ達がそちらから〔日本へ〕来た時に、彼等が述べることを正確に話すための通訳となるためです。[51]

文中にある「パードレ達」とは、ヨーロッパにいる学識のあるパードレという意味である。右の一節から明らかなように、ザビエルは山口にいるトルレスも、日本へ渡航しようとしているガーゴも、足利学校や大寺院へ派遣されるべき人物とは見做しておらず、ヨーロッパから派遣されて来る学問のある司祭の通訳として、また日本の諸事情についての情報提供者としての役割しか彼等には認めていなかったことである。彼は同じ日付のヨーロッパの同僚宛書翰でも同様のことを述べ、山口に修院を建てて、そこで日本語を学ぶことになるとし、ヨーロッパで選ばれて来日するパードレが日本の大学へ行くために、日本語をよく話し仏教諸宗派に精通したパードレとイルマンが彼等のために大きな助けとなるだろう、[52]と見通している。同年四月七日付のシモン・ロドリゲス宛、及び四月九日付のロヨラ宛両書翰においても、ザビエルはほぼ同じこと、即ち本年(一五五二

年)イエズス会の二人が山口へ行くこと、彼等の役割が日本の諸大学へ行くために来日するパードレのために忠実な通訳者となることであることを表明している。[53]

ザビエルは何故、足利学校や仏教の大寺院に派遣するパードレの件について頻りにヨーロッパに優れた人材を求めたのであろうか。その理由の一つは、彼が日本宣教の将来について決して楽観視していなかったからである。それは、彼が山口から府内に出発してすぐに仏僧や有識者達がトルレスの許に押しかけて論争を挑み、その経過と結末についてトルレス本人と彼の通訳者フェルナンデスから長い報告を得ていたからであった。これが、所謂「山口の宗論」と言われるものである。山口の仏像達は、ザビエルが出発したその日に意気込んでやって来てトルレスに質問を浴びせたが、このことは、彼等がザビエルの前に出ることをいかに怖れていたかということをはっきりと証明した、[54]とトルレスは指摘している。またトルレスが禅僧と対論したことについて、「神の特別の恵みがなかったならば、彼等を論破することはできなかったでしょう。……彼等の質問には聖トマス〔・アクィナス〕もスコトも信仰なしには答えることができず、彼等を納得させることができません」[55]と報じていたことから、ザビエルは、仏僧との宗教論争には神学と哲学を十分に身につけた者でなければ、仏教の教えを論破できないと痛感したのであろうということである。彼はパリ大学の中でも最も優秀なバルバラ学院に学び、終了後はアリストテレスの哲学を講義するほどのエリートであったので、その学殖をもって山口で最高の知者とうたわれた足利学校出身の元仏僧を改宗させることができたと思われるが、トルレスには彼ほどの学問も器量もなかったために、ザビエルもまたそのように見做していたと思われるために、彼は山口の宗論の推移と結果を知るに及んで、哲学と弁証法をしっかりと身につけたパードレが日本に不可欠である、と強く実感したと言うべきである。

もう一つの理由は、ザビエルがインドに帰還した当時、同地には日本に派遣すべき条件を具えた人材がいなかったことである。いかに学問があっても、人間として宣教師として推薦できるパードレをインドで見出せなかったからであろう。シモン・ロドリゲスに対する一五五二年一月三十日付の書翰に見られる次の一節は、学問同様に宣教師個人の経験がいかに大切である

かを強調したものである。

坂東の大学やその他の諸大学へ行くために、そちらから派遣される人物には、豊かな経験を積んだ人びとで、何らかの大きな困難や危険に遭遇し、さらにこれらのことで十分に試され、「また試された」ことが必要である、ということです。なぜなら、彼等は坂東やその他の諸大学に行けば、坊主達から烈しく迫害を受けることになるからです。繰り返してもう一度言いますと、彼等は厳しい迫害を受けるにちがいないということです。[56]

ザビエルは、この書翰を書いてから二箇月後の四月九日付でロヨラに送付した書翰において、「学問のある人びとには経験がなく、世間の迫害における試練を受けたことがないために、このような人たちは当地方では殆ど成果を挙げることができません。私が放逐した人びとはこのような人たちでした」[57]と述べて、学院長ゴメス等の放逐の理由を明らかにしている。彼は、前述したようにインド帰還後に、ゴメスの学院長としての不適切な言動を知るとすぐに彼の学院長解任とイエズス会からの追放を決めた。このため、鹿児島から日本渡航を命じ、京都及び足利学校へ派遣しようとしていたフランドル人ガスパール・バルゼオをゴアの学院長に就任させることになり、ザビエルが当初考えていたインドで第一級の人物バルゼオを日本に派遣するという構想は崩れてしまった。

バルゼオ神父に代わる人物について、彼は一五五二年にポルトガルからインドに来る宣教師の中に、「説教者ではないが、立派な素質とある程度の学識、及び労苦に堪える健康状態を具えたパードレ」がいるならば、日本へ送るべきことを新学院長バルゼオへの訓令において命じている。[58]また同じ訓令で、一五五一年にインドに来たアントニオ・エレディアとメルシオール・ヌーネス・バレトの二人のパードレの日本渡航について言及し、一五五二年にインドに来る宣教師達の中に優れた説教師が含まれているならば、エレディアとヌーネス・バレトを日本に送るために彼等の任地に新来の宣教師達を赴任させるよう命じている。[59]しかし、ザビエルはインド帰還後に彼等二人と十分に話し合う余裕がなかったようであり、彼等の人となりや学識、説教の能力等を的確に把握することができなかったように思われ、バルゼオ神父に対する訓令においても彼等に対する評価は一

定していない。才能ある説教師がポルトガルから来た時には、学問のあるヌーネス・バレトがエレディアよりも日本向きであり、彼の学問は日本ではより一層有効に生かされるだろうと述べていながらも、[60] エレディアに対する思いは捨てがたかったようである。ザビエルは、上川島から一五五二年十月二十日以降に発信した三通の書翰において、エレディアの日本渡航について言及し、来年信頼の厚い学問のある人物が日本に派遣されることを強く願い、ポルトガルから適任者が来ない時にはエレディアが日本に行くのがよかろう、とバルゼオに指図した。[61] 優れた説教者と称されていたエレディアの日本渡航は遂に実現せず、彼はポルトガルに帰った一年後の一五六二年にイエズス会を退会した。

ザビエルが日本からインドに戻った時、ゴアの聖パウロ学院に若冠二〇歳のルイス・フロイスがいた。彼は一五五二年十二月一日付の書翰において、バルゼオとガーゴ等が日本渡航を準備している時、「神から選ばれた者、特にキリストにあって最も尊敬すべきパードレであるパードレ・メストレ・フランシスコが〔神から〕遣わされて来た」と報じ、彼が帰着後に偉大な仕事をし、イエズス会を十分に照らし、これに栄光を与えた、[62] と少々心の高ぶった口調で書いている。そのフロイスが二四年後の一五七六年一月十七日に京都からコインブラの会員達に書き送った書翰の中に、ザビエルを回想した一節がある。それによると、彼はある日の夕刻、学院に居住するすべてのパードレとイルマンに講話をするために彼等を庭に集め、例の如く、しばし天を仰ぎ、次いで視線を落として彼の前にいた全員に視線を向けて各人を見詰めてきりっとした口調で次のように語った。「我が親愛なるパードレとイルマン方よ、私はあなた方の何人かの者を日本へ派遣したいと切望しています。しかしながら、日本のための役割、資格そして能力を〔具えた者を〕あなた方のうちの誰にも見出していないことを、私はあなた方に真実をもって断言します。[63]」この講話の場に、エレディアとヌーネス・バレトの二人も恐らくいたであろう。フロイスの回想に見られるザビエルの言葉からも、彼が日本宣教に並々ならぬ決意を抱き、日本に派遣すべき宣教師の決定に苦慮しながらも、最良の人材を日本宣教に宛てようとしていたことを知ることができる。

三、豊後における初期布教

豊後におけるキリスト教の宣教活動は、一五五二年九月七日にパードレ・ガーゴの一行が府内に来着してから本格化する。ガーゴ神父は、イルマンのフェルナンデスが山口から彼の通訳をするため府内に来ると、直ちに大友義鎮を表敬訪問してインド副王からの伝言を伝え、さらに五日後に義鎮を再訪してキリスト教の教理を彼に説いた。最初の訪問時における説明よりも詳細に話し、義鎮がインド副王に書状の中で表明したように、キリスト教の宣教について保護を与えてくれるように、そしてすでに山口の大内義長がトルレスに与えた許可状(大道寺判物)と同様のものを交付してくれるよう要請し、同時に上長のトルレスに会うため山口へ行く許可を求めた。[63] 義鎮は布教許可の交付と、市中に高札を掲示させる用意のあることを告げ、ガーゴ神父が山口から戻ってからイエズス会が要求するように大内義長下付の許可状の書式に添う形で許可状を与えるとの意向を示した。十月に入ってイルマンのペドロ・デ・アルカソヴァが、次いで数日後にドゥアルテ・ダ・シルヴァが山口のトルレスの許へ行き、ガーゴ自身は十二月下旬降誕祭の前に山口へ赴いた。それまでの三月半余りを彼はフェルナンデス修道士の助けを得て府内の宣教に従事したが、その詳細は不明である。日本語の習得に専念していたのであろう。

ガーゴがフェルナンデス、アルカソヴァの両イルマンと共に山口から府内に戻ったのは一五五三年二月十日である。彼は到着後すぐに義鎮を訪れ、翌日も再訪した。その折、彼は義鎮からインド副王に対する返書のポルトガル語文の作成を依頼された。その文面は、インド副王の義鎮に対する贈答品について謝辞を述べ、自領内に来るパードレ達に対する保護を約束して彼等に家屋を与えるという内容のものであった。また、パードレが自領内に滞在したことにより、彼を仲介にしてインド副王との親交を持つことができたことに満足している、と言い添えた。この書翰はゴアに帰還するアルカソヴァ修道士に託された。そして義鎮は再びロウレンソ・ペレイラをインドへの使者に登用した。彼等が府内から陸路平戸へ赴いたのは二月十四日であった。彼等が乗船したドゥアルテ・ダ・ガマの船が平戸を出帆したのは、十月十九日である。

ガマの船は途中上川島に寄港し、アルカソヴァは、ザビエルが同島で病没しその遺体がすでに三月半ばすぎにマラッカに運ばれたことを知った。彼は七、八日後に上川島を出発してマラッカへ向かったが、彼がガマの船でマラッカに渡航したか否かは明確でない。もしも彼がガマの船でマラッカに行ったならば、彼はマラッカから日本へ戻るガマの船にザビエルの訃報を託したであろう。そうすれば、ザビエルの訃報は一五五四年夏ころには府内と山口に届いたはずである。しかし、ドゥアルテ・ダ・シルヴァが一五五五年九月十日付で豊後からインドに発信した書翰によると、訃報が日本に届いたのは一五五五年のことであった。このことは、一五九八年にポルトガルのエヴォラで出版された『日本書翰集』では省略されており、アジュダ図書館所蔵の古写本によって知られる。これによると、訃報は一五五五年に二通届いた。マラッカに一時滞留していたイルマンのマヌエル・デ・タヴォラからと、シナから発信したアルカソヴァからの書翰であり、シルヴァは先ずタヴォラからの書翰でザビエルの死を知り、次いでアルカソヴァの書翰によって知らされたかのようである。[68] その書き順に従うと、タヴォラのが第一信、アルカソヴァのが第二信ということになる。

ザビエルの遺体についての情報は、メルシオール・ヌーネス・バレトが一五五四年五月に日本へ赴く途中のゴア・コーチン間の洋上でロヨラに書き送った書翰の中で詳しく述べられている。それによると、ポルトガル人達はザビエルの死後多量の石灰を詰めた棺に遺体を納めて海岸近くに埋葬し、三箇月半経ってマラッカへの帰航が迫っている時に遺体を検分し、臭気に耐え得るならばマラッカに運んで同地の教会に埋葬しようということになった。ところが、遺体はまったくの無疵で甘い香りが漂い、片方の腕を一度叩いたところ、肉はあたかも生きているかのように反応し、衣服も履物もすべて石灰に浸食されることなく元の状態を保っていたとのことであり、この不思議な事態に驚いたポルトガル人達は遺体をマラッカに持ち帰り、棺から出した遺体を墓穴を掘って埋め、マラッカの風習に従って摺鉢で押し固めた。そのため、片方の膝、その他の箇所が一部損傷を受けた。その数箇月後モルッカ諸島からゴアに行こうとしていたタヴォラ修道士が遺体を確認してゴアに運ぶことになったが、その出発の一五日前に折り良くアルカソヴァと大友氏の使臣ロウレソソ・ペレイラがマラッカに到着した。このようにし

て、ザビエルの遺体がゴアに帰還したのは一五五四年三月十六日のことであった。遺体は死後一五箇月間も石灰の中にあったにもかかわらず、その肉体は柔らかくて弾力性があり、芳香を放っていた[67]、と言われる。

ゴアでは全市をあげて熱狂のうちに彼の遺体を出迎えた。インド管区副管区長ヌーネス・バレトは、ザビエルを心から崇敬していたメンデス・ピントと共に船を出して海上で遺体を出迎え、聖パウロ学院にこれを安置した。ヌーネス・バレトはアルカソヴァ修道士から日本宣教の現況を聞き、大友氏が宣教師を厚遇して、再び使者を遣わしたことから、大友氏改宗の可能性があることを信じて日本へ渡航することを決意した。彼はその一方で、「祝福されたフランシスコに代わって後を継ぎ、その足跡を辿っていけば、私は過ちを犯すことはないと考え、……大将(ザビエル)が亡くなった場所に兵士達が駐けつけるのは必然である[68]」と考えた。インド副王も大友義鎮からの親書を読んで、彼の日本渡航を支持した。ポルトガルへの帰国を決めていたメンデス・ピントがザビエルの遺体に際会し、またヌーネス・バレトの日本渡航の意向を知って府内への同行を決断すると、インド副王は彼を自分の使節として大友氏の許へ遣わすことにした。

ザビエルの遺体帰還という宗教的熱狂の高まりの中で、アルカソヴァ修道士の日本宣教に関する実情報告と、大友氏派遣の使者の再訪が、インド副王やイエズス会の上長達の眼を日本に、そして豊後府内に一気に向けさせることになったようである。ヌーネス・バレトは、府内に同行するパードレとして三〇歳そこそこのガスパール・ヴィレラを選び、イルマン五人[69]、聖パウロ学院で養育養成されていたリスボン出身の孤児五人に、大友使臣のロウレンソ・ペレイラらを加えて、四月十六日にゴアを出帆した[70]。孤児五人を同行したのは、外面を慮る日本人を意識してミサの祭儀を厳粛に行うためであり、また日本語を覚えさせてヨーロッパから日本に来るパードレ達の通訳として奉仕させるためであった[71]。彼等はミサ聖祭には聖歌を歌った。やがて聖歌隊が組織されて教会音楽が府内に流れるようになるのは彼等によるところが大きかったと言えよう。彼等はグレゴリアン聖歌 el canto lleno と多声部聖歌 canto de organ を教え込まれていたからである。

ヌーネス・バレトの一行が苦難に満ちた航海をなし遂げて府内に着いたのは一五五六年七月のことであり、ゴア出発からす

でに二年三箇月が経っていた。ところで、大友使臣ロウレンソ・ペレイラがアルカソヴァと共に府内を出発したのち、帰国するまでの三年数箇月における豊後の宣教活動はどのように展開していたのであろうか。

ガーゴ神父は山口から府内に戻ってすぐに義鎮から布教許可状を下付されたが、その写しはアルカソヴァによって山口の大内義長交付の許可状の写しと共にゴアに齎された。[72] ガーゴが布教許可状と共に、教会を建てるための土地をも義鎮から与えられたことは、前述のヌーネス・バレトの一五五四年五月付の書翰からも明らかになるが、その情報もアルカソヴァがゴアに帰還したのちに彼に伝えたものであった。その書翰によると、「豊後の国王は……教会、宿舎、菜園及び彼等(パードレ達)の望むものすべてを造ることができるように永久に付与するものとして土地を与えた」。[73] その永代に付与された土地に関しては、何人も死罪に処せられることも逮捕されることもないとの特権が認められていた。これは、ガーゴ神父がヨーロッパの教会において見られたアジール(治外法権)を義鎮に認めさせた結果であろうか。

義鎮がガーゴに付与した土地は、恐らく江戸時代に作成された「戦国時代府内絵図」に記載されている「タイウストウ(ダイウス堂)」に該当するものであったと考えられる。これは大友御屋敷の後方に位置し、アルカソヴァによると、「たいへんすばらしい場所にある土地」であった。しかし、教会の建造は布教許可状と教会建築用地が与えられた二月中旬に直ちに着工されることはなかった、と思われる。それは、義鎮に対する殺害計画のため府内が騒然として、その鎮静化に時間がかかったからである。アルカソヴァによると、ガーゴ等が山口から府内に戻った時、義鎮の重臣服部右京大輔、一万田鑑相及び宗像鑑久が謀反を起こし、アルカソヴァ等が平戸に向けて府内を出発した二日後の二月十六日には、府内の混乱がさらに拡大して大友御屋敷では敵味方が入り乱れて争い、遂には謀反を起こした三人とその家族が成敗されて彼等の屋敷に火が放たれ、近所の武家屋敷や商家など三〇〇軒に類焼したことから、[74] 教会の建築が速やかになされる状況になかったことが知られる。しかし、ガーゴ自身の一五五五年九月二十三日付、平戸からの書翰によると、府内には一五五五年に明らかに修院(casa)と小聖堂(capella)が造られていたこと、しかもほどなく七月二十二日のマリア・マグダレナの祝日にたいへん大きな十字架一基が立てられたので、修院と

小聖堂は七月二十二日以前に建造されていたことになる。この小聖堂はデウス堂と称され、いつしか日本の寺のように顕徳寺と言われるようになったことは「府内古図」の記載によって知ることができる。

府内における宣教活動は当初は決してはかばかしくなかったようである。仏僧との間に論争があり、彼等はガーゴなどに悪態をつき、彼を悪魔と罵り嘲笑して、ガーゴを神と言って揶揄し、また神はいづこにいるのかと問い、街を歩くと洗礼についてあざ笑い、キリシタンになるために体を洗いたいとからかい、あるいは仏僧達が煽動して夜には修院に投石して嫌がらせを働き、パードレ達が人間を喰らうとの噂が立てられた。しかし、義鎮が修院への投石について知って警護人を遣わしたことから投石は止んだと言われる。[75]

府内及びその近在における宣教活動は、義鎮による謀反鎮圧後、そして教会の建造後に俄かに進展したように思われる。ゴア渡航のため平戸で待機していたアルカソヴァは、同地を出発する十月十九日以前に豊後における宣教活動についての報告を得ていた。それによると、二月十六日以降十月初め頃までの期間にすでに六〇〇ないし七〇〇人の改宗者があった。[76]彼等の間で注目されるのは、府内の一レグア(五キロメートル)離れた高田村の領主が改宗し、彼の依頼によりガーゴが高田に赴いてその日のうちに彼の妻と四人の息子を含む三〇人に洗礼を授けたことである。領主の洗礼名はアンセルモと称した。[77]

豊後でキリシタンとなった者の多くは、信仰においてたいへん堅固でよく教育されており、そのためにあらゆる困難に堪える用意ができいる、とアルカソヴァは高く評価している。彼等は自分達がキリシタンであることを街で公言して歩き、神について説き、ある者は自分の住んでいる町内で教えを説いて多数の者を改宗させ、ある鍛冶屋は市中を絶えず説教しながら歩いて改宗を望む者がいれば、その者をすぐにパードレの許に連れて来た、というようにいくつかの事例が報告されている。[78]

大友義鎮の警護人派遣により修院に対する狼藉が止んだのち、ガーゴはキリスト教に関する書物を著して日本語に訳し、これを義鎮に献上した。彼はそれを執政達に読み聞かせたのちガーゴに返却し、その写しを作らせてキリスト教に対して柔軟な姿勢を見せたが、これ以降一五五五年九月十日に至るまで宣教師達は平穏のうちにある、[79]とシルヴァは伝えている。彼の指摘

によると、一五五五年の四旬節(二月二十七日から四月七日まで)には七〇〇人の改宗者があった。[80] ガーゴが同年九月二十日及び二十三日付で平戸から発信した三通の書翰において、豊後のキリシタンが一五〇〇人であると報じているのは、決して過大な数字ではなかったことを示している。

一五五五年九月の時点で、豊後には府内を除いてキリシタンの中心が三つあった。一つは一五五三年に改宗者が出た高田村である。シルヴァによると、領主アンセルモの説得によって彼の土地の者ほぼ全員が改宗したが、彼の同じ書翰の別の箇所には高田の信者は五〇～六〇人である、[82] と記されている。

もう一つの中心は敷戸村であり、高田村と同数の五〇～六〇人のキリシタンがいた。高田のアンセルモのように、敷戸村にもキリスト教徒の中に一人の有力者がいたことが伝えられているが、[83] 彼も領主層に属する者であったことが考えられる。

三つ目の中心地は直入郡の朽網にあり、国衆朽網鑑康の老臣ルカスが同地の指導的立場にあった。朽網におけるキリスト教界の発端は、府内のキリシタン、アントニオが商用のため一五五四年に同地を訪れた折り、大家族を有する老人と神のことについて語らって彼を納得させて改宗に導いたことであった。[84] フロイスは、平信徒のアントニオはすでに七〇歳くらいの老人で背が高く痩せており容姿が優れ、有徳の人であった、[85] と指摘している。シルヴァは、ルカスが妻や他の者たちを改宗させるために本年一五五五年にそこ(朽網)に行ってくれるよう願ったと記しているので、ルカスは府内に出た時に改めてガーゴ神父から洗礼を授かり、家族の改宗のために神父の朽網訪問を乞うたようである。ガーゴはフェルナンデス修道士、府内の信者で説教者として宣教師を援助していたパウロ、そして老人のアントニオを同伴して同年の四旬節に近い頃、二月二十日前後に朽網を訪れ、ルカスの妻と息子の二人を含む一族六〇人、全体で二六〇人を改宗させた。[86] ガーゴはこの訪問時に領主朽網鑑康に会い、彼に教えを説いた。彼はキリスト教徒になりたいとの意向を示したが、国王大友義鎮がこのことについてどのように思うだろうかと忖度して改宗するには至らなかった。[87] 同地の信者は一五五五年九月の時点で三〇〇人に達していたが、ルカスは彼等の父の如き存在であり自宅近くに教会を建てた。朽網はのち宣教師達が肥前有馬と府内を往還する際の経由地として重要な

位置を占めることになる。この三カ所の他にも、大野郡井田には数名のキリシタンがいた[88]。フロイスの『日本史』には「最初の四人のキリスト教徒[89]」という記載が見られる。

豊後における初期布教では、宣教師が不足していた事情はあるが、平信徒の活動が際立っていたことである。それは、初期教会の活力を表しているようでもあった。彼等についてはすでに少しく言及したが、府内には一五五五年九月の時点で数名のキリシタンがパードレやイルマンに代わって説教を行っていた。この中の一人は「福音の大説教者」と称されたパウロで、仏教特に禅宗に精通していた。彼は「四〇歳を越えて、素質と才能があり、日本語を話すことにたいへん鋭敏な」人物であった。彼を高く評価していたイルマン・シルヴァは、パウロの説教について言及して、彼は神の教えが真実であることを明確に理解してキリスト教に改宗したのであり、以前に彼が身を委ねていた仏教の偽善・欺瞞を厳しく非難して神の教えの卓抜していることを説いている[90]、と述べている。ガーゴは彼の説教を通じて多大な成果が得られていることを指摘して、彼を修院に留め置きたいとの意向をロヨラ宛の書翰において表明し、実際に朽網の布教に伴ったばかりでなく、一五五五年夏には平戸にまで彼を同行した[91]。

一五五六年七月にゴアから府内に着いたイルマン・ベルシオール・ディアスは、四年後の一五六〇年十二月十七日に府内からリスボンの同僚ペドロ・アネスに送った書翰の中で、府内の信者達の厚意に報いるため彼等に手紙を書いてくれるよう依頼している。彼等信徒達の一人がパウロである。彼の他にトメ、ペドロ・フェレイロ、ジュスティーノ、ヴィセンテ、バスティアーン、そして朽網のルカスの名が見られる[92]。いづれも平信徒の中心人物として宣教師達を助力し、彼等に代わって教理を説き説教を行って一般信徒を指導していたのであろう。

豊後においては府内を中心にしてキリシタンの数は一五五三年以降一五五五年九月までの三年半の期間に順調に増大したが、府内のキリスト教徒の大多数は下層の者たちであった。シルヴァの指摘によると、多くの病気持ち、癩者(ハンセン氏病者)、盲目の人や聾唖者、そして熱病に苦しむ者が教会に集まって来て、病いを癒され回復したのちキリスト教に改宗した者は一五

五五年の一年だけで三〇〇人以上であった。彼等に与えられる肉体の薬は聖水だけであったが、特に同地で一般的な病気であった眼病を患った者たちは聖水によって回復した、[93]と言われている。結膜炎に罹っていた者が多かったのであろうと思われる。このため、近在の村々から人々が来るようになった。貧者の多数の者がキリスト教に改宗し、彼等は祈りを学ぶために修院に来たのち、喜捨を求めて街に出て行った。[94]このことから見て、府内のキリシタンには最下層の人々が多かったようである。一方、富裕な階層に属する人々の改宗が遅々として進まなかったことがガーゴの指摘によって知られる。即ち、

土地の有力者達は悪魔がこの者たちに説いたことを深く信じ、悪しき生活に縛られて現世のことしか念頭にないためにキリスト教徒にはなりません。そして彼等は〔ミサや説教を〕聴いた時には逆のことを理解しますが、敵や現世が彼等を縛りつけて放さないのです。現世は、これらの人々の霊魂にとっては最大の敵対者です。[95]

一五五六年七月に府内を訪れて十一月に同地を去ってゴアに戻ったインド管区副管区長ヌーネス・バレトもまた、府内のキリシタンの貧しさに言及して、すでに一〇〇〇余人以上の者が受洗しているが、彼等は一般的に貧しくパードレ達の施しを得、また彼等が洗礼を受けて健康を得ているのを見て、家族や息子、友人達全員がキリシタンになったのに対し、山口のキリシタン達は地位がありよい理解力を持った人々である、[96]と指摘している。

一五七〇年に布教長として来日したフランシスコ・カブラルが、一五七六年九月九日付の書翰の中で府内の初期キリスト教界について、私達が病院を有していたために治療を施された病人がキリシタンになり、同教界は下層の者と伝染病患者からなっていて地位ある人がいなかったが、それは、地位ある人が教えを良いと思って信仰しようとしても彼等との交際がないため信者にならなかったためとし、慈善事業が教界の拡大と信者の増大のためにならなかったと批判的に述べていることは、[97]多少誇張があるとは言え、かなり正しい認識であった、と見ることができる。カブラルの前任者トルレスはゴアの上司ヌーネス・バレトに対する一五六〇年十月二十日付の府内発信の書翰で、「豊後のキリスト教徒の数がなかなか増えない」と報じ、その理由を彼自身の熱意の欠如と至らなさにあるとして自己責任を痛感している。[98]一五六〇年前後の豊後のキリスト教界が信者獲得

の面で、特に上・中階層の市民、有識者、武士層への改宗活動の面で停滞を余儀なくされていたことは否定できないようである。

府内を中心にした初期布教は、ガーゴ神父が病気のため一五六〇年にゴアに戻り、トルレスを除くと、若い宣教師によって担われていた。ザビエルが期待していたメルシオール・ヌーネス・バレトは、その学識を日本で活用することなく、日本渡航を決意した時の強い決意もいつしか萎えて日本を去った。日本の仏僧と対決できるほどの有能な宣教師の派遣は一五六〇年代にはまだ実現しなかった。しかし、布教長トルレスがザビエルの理想を実現しようと奮闘した結果が、一五七〇年代におけるキリシタンの増大となって実現したことは確かなことである。

四、豊後出身の宣教師及び教役者について

一五五一年九月にザビエルによって初めて府内において説かれたキリスト教は、翌年来日したバルタザール・ガーゴ神父によって引き継がれ、前述したようにイルマン・フェルナンデスが彼を補佐した。イルマンのドゥアルテ・ダ・シルヴァは一五五五年初めに山口から府内に異動転任し、翌年五月に布教長トルレスが山口から府内に避難して来たために、府内は日本におけるキリスト教宣教の中心地となった。この年七月にインドから副管区長ヌーネス・バレトが日本視察のためガスパール・ヴィレラ神父を伴って府内を訪れたことは、すでに述べた。同じ一五五六年、元商人ルイス・デ・アルメイダが府内においてイエズス会への入会を許された。彼が前年設立した育児院を世話していたことは、ヌーネス・バレトの一五五五年十一月二十三日付のマカオ発信の書翰によって知ることができる。

ルイス・ダルメイダという名の、当地方でよく知られた人物が、本年〔一隻の船で〕日本に行きました。〔その人物は豊後に行って、そこでパードレ・バルタザール・ガーゴに会いました。そして、その地で行われている悪習、即ち貧しい婦人達が出産し、その息子達を敢えて扶養することができない時には、生まれると彼等を殺すことを知りました。彼とパードレ・バルタザールは豊後の国王に話しました。この国王は子供と乳母を与えることを保証し、前述のルイス・ダルメイ

ダは養育費を出すことを引き受けました。このようにして、彼等は豊後においてそれらの幼児達のもつ本来的な哀れさに心を動かされて、病院（育児院）を造り、そこでこれらの子供達が養育され洗礼が授けられるようにしようとしています。そして、同じように養育に当たる乳母達は貧しいキリスト教徒の女性です。そうした事業によって日本の全領土において豊かな教化がなされるでしょう。この同じ人物は〕私が日本に到着しないのを見て、私達がマラッカにおいて船に乗れなかったか、あるいは〔どこかに〕避難したものと考えて、もしも私達を日本に連れて来るための船を購入する必要があるならば、そのために使うようにと、彼の一人の友人に二〇〇〇クルザドを託しました。[99]

右の一節から、ポルトガル商人アルメイダが中心になって育児院が一五五五年に創設されたことを確実に知ることができると共に、このことにイエズス会と領主大友義鎮が深く関わっていたことも知ることができる。イエズス会に入ったアルメイダは、さらに一三〇クルザドの寄進を募って一五五六年十二月ないし一五五七年一月に病院を建て、一五五九年にさらにもう一軒の病棟を建て、これに必要な三〇〇クルザドの寄進を得た。[100] 病院には信者一二人からなるミゼリコルディア（慈悲）の組があり、彼等のうち二人が患者の世話に当たり、規則に従って貧者に喜捨を分配した。トルレスは、患者が洗礼を望んでも回復後再びやって来て洗礼を望むのでなければこれを許さなかった。それは、受洗すればもっと良い治療が受けられると思ってキリスト教に改宗する者がいたからである。[101]

府内の修院には一五五九年の一時期、トルレスを初め、平戸を追放されたヴィレラと、博多から避難して来ていたガーゴの三人のパードレがおり、他にイルマンのフェルナンデス、アルメイダ、シルヴァ、一五五六年に来日したベルシオール・ディアス、日本人ロウレンソ、一五五七年に日本で入会したギリェルメ・ペレイラとルイ・ペレイラの都合一〇人がいた。そのため、トルレスはガーゴとヴィレラと協議して新たな宣教に着手することとし、またザビエルの当初の計画を実現するためヴィレラとロウレンソを京都に派遣した。彼等が府内を発ったのは、一五五九年九月二日のことである。

府内を拠点にした宣教体制は、トルレスが肥前横瀬浦に移る一五六二年七月まで続いたが、この間、府内から豊後各地への

宣教活動が盛んに行われた。この時期にキリスト教に改宗した者たちが豊後における初期教界の礎となったのであろうことは容易に想像することができる。そして、彼等の子弟がイエズス会のセミナリオに学ぶなどして教界のために働いた者も決して少なくなかったことは、以下に掲げる「豊後出身の宣教師・教役者名簿」によって知ることができる。名簿に見られる豊後出身の宣教師(パードレ、イルマン)、教役者の同宿(伝道士)と看坊などの数は二二人、この他にも報告書や書翰などで確認できない小者 moço de serviço や看坊が少なからずいたと思われる。豊後出身のパードレとイルマン一八人の出身地は、府内、高田、大在(大佐井)、清田、野津、日田など、キリスト教が早く宣教された土地であった。彼等の出生の年代は、確認できる一四人について見ると、一五五〇~六〇年代が一〇人、一五七〇年代が三人、一五八〇年代が一人である。彼等のうちの多数の者が初期キリシタンの子弟であったことは否定できない。

大分郡高田庄出身者と思われる者は三人確認されるが、そのうちの一人、司祭平林マンショは恐らく高田庄成松名支配の平林氏の一族であったであろう。彼は一五七三年頃の生まれで、一五九五年十月にイエズス会への入会を許されたが、入会前の六年間を有馬のセミナリオで過ごしたと思われる。セミナリオ終了と共に、彼はイルマンとしてノビシアド(修練院)で二年を送り、将来を嘱望されていた一人として一五九八年にマカオのコレジオに送られ、哲学課程三年と倫理神学課程二年を修めたのち、一六〇六年八月に帰国した。帰国後すぐに豊後に配属されたと思われ、一六〇七年二月作成の名簿によって豊後にいたことが確認される。一六〇七年十月作成の名簿では長崎のコレジオにおり、多分、コレジオでの教育に携わっていたのであろうと推測される。一六一三年二月作成の名簿によると、京都・下京の修院 casa reitoral におり助祭として、また説教師として活動していた。彼が下京の修院に配属されたことは、彼が豊かな学識と優れた能力とを具えていたことを示している。この時期の修院長はスペイン人のペドロ・モレホンであり、他に最終誓願を終えていた幹部のクリストヴァン・フェレイラ、ベント・フェルナンデス、ジェロニモ・アンジェリスの各司祭がいた。さらに日本人イルマンでは天草出身のパウロ、仏教に精通していた内藤ルイスと元仏僧のファンカン・リアン、式見マルティーニョ、絵師のタデオがおり、[102] いずれも京都の宣教に相応

豊後出身の宣教師(パードレ・イルマン)・教役者名簿

1．司祭(パードレ)の名簿

氏　名	修道会	生 年	出生地	入会年	叙階年	叙階地	没 年	死没地	備　考
平林 Mancio	S.J.	1573？	豊後	1595.10	1613	長崎	1615.3.21	長崎	1598/10～1606 マカオ在
Jeronimo de la Cruz	CL.		豊後		1619	マニラ	1632.9.3	江戸	1631帰国、殉教、フランシスコ会第三会員
岐部 Pedro Casui	S.J.	1587	伊美	1620.11	1620.11	ローマ	1639.7	江戸	1630帰国、殉教
Miguel de San Jose	O.S.A.		府内	1625.3	1628？	マニラ	1634？	長崎	1632.8帰国、殉教

(S.J. イエズス会, CL. 教区司祭, O.S.A. アウグスチノ会)

2．イルマンの名簿

氏　名	生 年	出生地	入会年	没 年	死没地	備　考
工藤 Paulo (Soter)	1562/1557	津久見	1585	1614.11.23	ロノ津	1959病気のため退会。看坊、殉教
斎藤 Andre	1566	豊後	1595.10	1615.2.28	マニラ	1603～1611.12 小倉レジデンシア在
柴田 Diogo	1564	野津	1602	1618.9.14	マカオ	下京、有馬、長崎在
Simeão	1568	豊後	1586.8			1607.10～1612.3退会。有馬セミナリオの日本文学の教師
志賀(進士) Aleixo	1565	豊後	1589			1614.11マニラ、1618帰国、1919退会。看坊、殉教
Sebastião	1568	大在	1583			1589.1.26作成の名簿以降不明
田村 Romão	1553	清田？	1583	1627.10.31	マカオ	松原、松岡の記名もある
トクマリ(徳丸？) Lião	1559？	高田	1580.12			1959放逐。日本語の書物作成と書写に関わる
徳丸 Mateus	1568	高田	1586.8	1596.3～1603.10	マカオ	1596.3.6マカオ着、ラテン語第1級修学
Thomas		豊後				1586在会、豊後の志賀在
荻原 Christovão Dias (Leitão)	1573	豊後	1604末	1636.5.21	マカオ	マカオで入会、1607.9マカオ衣服係。1614.11マカオに、図書係
日田 Matias		日田？				1603.10作成の名簿のみに記載
溝口 Mancio	1572	府内	1602	1615.2.19		病死。志岐、崎の津、野津在
リョウセイ Bartholameu	1562	豊後	1595	1629.10.3	マカオ	大坂・堺在、1614.11マニラ

3．同宿(伝道士)の名簿

氏　　名	生 年	出身地	没 年	死没地	備　　考
ジェンポ・ヴィセンテ (Gempo Vicente)		豊後	1618.4.10	萩	大坂のカーザに多年あり、1617萩に赴き同地で布教に従事
遠(円)甫シモン (Jempo Simão)	1580	野津？	1623.12.4	江戸	肥後国ノズと記載あるも誤記ならん。18歳の時同宿となりアンジェリス神父に同行し東北・松前に赴く
吉岡アントン(アントニオ)	1560	野津	1625	豊後	病死、40年間イエズス会に奉仕、ペドロ・パウロ・ナヴァルロの同宿として豊後布教に従事、死の直前に入会

4．看坊の名簿

氏　　名	生 年	出身地	没 年	死没地	備　　考
葛木丹州オルガンティーノ (半笑ほるかん、Canzuraqi Tanxu Organtino)		高田	1624.8.26	豊後	大友旧臣。高田のイエズス会の教会の看坊
〔工藤ソルテ〕					
〔志賀アレイショ〕					
《参考》					
清水ボクサイ・シモン		豊後？	1620.8.16	小倉	豊前国小倉の看坊、殉教
宮永ジュウシン・ジョアン	1554	豊前	1618.3.5	中津	中津教会の看坊、殉教

しい経験と学殖、実力を具えた優れた人材ばかりであった。平林マンショは一六一三年秋には司祭に叙階されたようである。一六一四年の禁教令発令によって同年十一月に大多数の宣教師がマカオとマニラに追放されたが、すでに司祭であった平林マンショは残留して長崎地方に潜伏した。しかし、元来健康でなかったために一六一五年三月二十一日に長崎で病死した。

高田出身のイルマンには、一五五九年頃に出生の徳丸リアンと、一五六八年出生の徳丸マテウスの二人がいた。徳丸リアンはイエズス会にあること一五年、日本語の書物の印刷や書写に従事していたが、一五九五年にイエズス会から放逐された。徳丸マテウスは入会して一〇年後にマカオのコレジオに派遣されたが、同地で病没した。

各地の教会には、これを管理し、信者達の世話をする看坊と称した者がいたが、高田にあったイエズス会の教会の看坊は葛木丹州オルガンティーノという者であった。彼は元大友氏の家臣であり、大友義統の改易後に出身地の高田に土着した者と思われる。彼は一六二四年八月二十六日に妻ルチアと共に火刑に処せられて殉教した。イエズス会の管区長マテウス・デ・コウロスが一六一七年(元和三)に全国の指導的なキリシタンに署名を求めて集めた「コウロス徴収文書」というものが残っているが、高田の徴収文書には「葛木半笑ほるかん」を筆頭にして、平林、工藤、徳丸の姓の者三一人が署名をしている。豊後各地の署名者の数について見ると、臼杵五人、由布院六人、野津一二人、日出八人、府内六人、利光・戸次・清田一七人、種具・丹生・志村・大佐井二五人となるが、高田の署名者数が際立って多いことが分かる。これは、初期教界の精神と伝統が宣教以来六四年を経た禁制下の一六一七年の時点でも継承されていたことを示唆している。

豊後出身のイルマン一四人のうち半数の七人は、宣教師が国外に追放された一六一四年十一月に彼等に同行してマカオとマニラに渡ったが、彼等のうち六人は高齢のため同地にとどまり客死した。豊後出身の宣教師・教役者一二人のうち殉教したものは七人、その内訳はパードレ三人、同宿二人、看坊二人(一人は元イルマン)である。迫害の最中に病死した者は三人、前述したパードレの平林マンショの他に、イルマンと同宿が各一人である。野津出身の同宿吉岡アントン(アントニオ)は一六二五年に六五歳で豊後で病死したが、イエズス会のために奉仕すること四〇年、イエズス会はその労に報いるため彼の死の直前に

彼をイルマンとして同会に迎え入れた。

一六二〇年にローマで司祭に叙階されたのちイエズス会への入会を許された岐部ペドロ・カスイとザビエルとの関わりについても少し言及すべきかと思われる。ペドロの父ロマンがキリスト教に改宗したのは一五八五年のことであるが、青年武士の彼はフランシスコ大友宗麟の強い影響を受けて、熱い思いを抱いて洗礼を授かったのであろうと推測される。宗麟は恐らく自分が洗礼を受けるに至ったその発端について、即ちザビエルとの出会いと、それ以降抱き続けて来たザビエルへの敬愛の念についてロマンに語ることがあったのではなかろうか。宗麟が、浦辺においてデウスの教えが必ずひろまるとの強い確信をもって豊後教区長のペドロ・ゴメスに浦辺へのイルマン派遣を要請したのは一五八四年のことであった。果たせるかな、一五八五年に浦辺ではロマンの家族と一族を含む一四四人の改宗者があった。宗麟と岐部ロマンとの関わりが注目される所以である。宗麟が死没した一五八七年に生まれた岐部ペドロが一六〇〇年に一三歳で長崎のセミナリオに入るにあたって、父ロマンは自分がいかにしてキリシタンになったか、そして改宗のきっかけとなったと思われる宗麟との出会いと、宗麟が彼に語ったであろうザビエルへの思いなどを息子に語り聞かせることがあったのではないかと思われる。

岐部ペドロは、ザビエルに倣うかのように、ひたすら神に祈り神にすべてを委ねることによって多くの苦難を乗り越えてローマに辿り着くことができた。一六二二年三月十二日にサン・ピエトロ寺院において挙行されたイグナティウス・デ・ロヨラとフランシスコ・ザビエルの列聖式に参加した岐部ペドロは、この時ザビエルからどのようなメッセージを受け取ったのであろうか。日本への密入国を計画してフィリピンのルバング島から船出しようとしていた彼は、一六三〇年五月七日付でローマの総会長補佐ヌーノ・マスカレニャスに書き送った書翰において、「聖なる使徒フランシスコ・ザビエルの助力を絶えず乞い願って」[19]いることを表白している。ザビエルが豊後に伝えた福音は、大友義鎮（宗麟）の保護下に数万の人々に受け容れられた。そして、その三十数年後に国東半島の浦辺に点った小さな信仰の灯が、岐路ロマンから息子のペドロに受け継がれて大きな輝しい光彩を放つまでになったことを確認することができる。

おわりに

ザビエルの外国宣教に対する姿勢は一貫しており、彼は神の御名を異国に宣べ伝えることを神の御旨として受け止めていた。[104] 周囲の者たちが危険な旅として恐れていた日本渡航に関して、ザビエルは自分が畏れるのは神に対するものだけであるとして、神に対する絶対的服従を誓い、[105] また中国への新たな渡航に際しても、ゴア出発を前にしてポルトガル国王ジョアン三世に書き送った一五五二年四月七日付の書翰において、多くの予想される苦難や危険に対して怖れるべきは神に背くことによる懲罰であるとし、神の計り知れない慈悲を信じて出発することを表明している。[106] 彼のこのような神に対する信頼は、日本宣教を経験することによって一層確かなものになったように思われる。彼の苦しみ・苦悩が大きく深ければ深いほど、神はそれに相応しい大きな喜びを彼に与えたように思われる。ザビエルは府内・沖の浜を出発してインドに着いた数日後に書いた書翰において、山口での宣教について次のような言葉を残している。

> いかなる教えによって救いが得られるか知りたいと望んでいる賢明な人びとのために働く仕事が、それ自身大きな満足を齎します。そして、山口で太守(大内義隆)が私達に神の教えを説く許可を与えたのちに、大勢の人びとが質問したり議論したりするために来たのはまさにそういうことでした。それで私達の主である神が私達を通じて異教徒達を辱め、あるいは私達がいつも彼等に対して勝利を収めていたことを考える時、私は生涯においてそれほどたくさんの霊的喜びや満足をいまだかつて受けたことはなかった、と真実言うことができると思います。[107]

右の一節からも明らかなように、ザビエルは山口において生涯で初めて、そして最後の至福の時を享受した。彼が将来の日本宣教に対して大きな期待と希望を抱いて沖の浜からインドに出発した姿を思い描くことができるようである。

註

（1）メンデス・ピント著、岡村多希子訳『東洋遍歴記』3（東洋文庫三七三、平凡社、一九八〇年）、一六六～一六九頁。

（2）池上岑夫他訳『ロドリーゲス日本教会史』下（大航海時代叢書X、岩波書店、一九七〇年）、四九〇頁。

（3）（4）東京大学史料編纂所編『イエズス会日本書翰集』訳文編之一（下）（東京大学、一九九四年）、一〇五頁。

（5）同右、二四～二五頁。

（6）『東洋遍歴記』3、一七三頁。

（7）『ロドリーゲス日本教会史』下、四九二頁。

（8）同右、四九六頁。

（9）同右、四九四頁。

（10）Georg Schurhammer, FRANCIS XAVIER HIS LIFE, HIS TIMES, Volume IV, translated by M.Joseph Costelloe, Rome, 1982. p.258.

（11）『イエズス会日本書翰集』訳文編之一（上）（東京大学、一九九二年）、二四三～二四四、二三五頁。

（12）同右、二四三～二四四頁。

（13）同右、二三〇、二五八頁。

（14）大友義鎮の対外貿易について大分県立先哲史料館の展示「府内と臼杵から戦国の世界が見える」に関連して二点について言及する。㈠義鎮はゴアに大砲を求めて恐らく一五七二年に使者を派遣した。使者はエスペラ砲を入手して一五七三年に帰国したが、彼の乗船したポルトガル船は台風のため七月二十一日に天草沿岸ないし阿久根沖で遭難して大砲は失われた。展示中の石火矢（大砲）は、義鎮が一五七四年以降に再びゴアに注文したものであったと思われる。㈡義鎮が南蛮国に船を派遣したことを示す天正元年（一五七三）八月十五日付の書状と東南アジアから将来の陶器に関連して、イエズス会のアフォンソ・デ・ルセナ神父の回想録によって、義鎮が一五七七年にも東南アジアに引き続き派船していたことが知られる。彼の乗船した船がトンキン湾で豊後王派遣のジャンク船に遭遇し、ルセナはこのジャンク船に来年日本

へ渡る旨を記した書状を託した。義鎮が一五七〇年代に東南アジアに積極的に派船するようになったのは、一五七一年以降ポルトガル船の長崎入港が恒常化するようになったためであったと思われる。

(15) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(下)、一〇八頁。

(16) 同右、九二頁。

(17) 『日本教会史』下、四五〇頁。

(18) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(下)、一三八頁。

(19) 『東洋遍歴記』3、一五七～一六二頁。

(20) 山口県立図書館所蔵。京都大学文学部博物館にある写図では「大導寺」と記されている。

(21) Luis Frois, HISTORIA DE JAPAM, anotada por Jose Wicki, I. Lisboa, 1976. p.99. 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』6(中央公論社、一九七八年)、一五八頁。

(22)(23) 『イエズス会日本書翰集』原文編之二(一九九六年)、二〇三頁。

(24) ローマ・イエズス会文書館 Archivum Romanum Societatis Iesu 所蔵、日本・シナ部文書 Jap. Sin., 4, f.72.

(25) アジュダ図書館 Biblioteca da Ajuda 所蔵、49－Ⅳ－50, f.110v.

(26) 『新井白石』(日本思想大系、岩波書店、一九七五年)、六〇頁。

(27) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(下)、一〇七頁。

(28) 同右、七五頁。

(29) 一五五二年十二月十五日付書翰(同右、二三七頁)。

(30) HISTORIA DE JAPAM I, P.45. 『日本史』6、七〇頁。

(31) フロイスの豊後府内滞在は、一五六五年一月一日に上京するため同地を出発するまでの一時期、一五七七年一、二月以降一五八一年三月八日までの期間、同年十月三日から同月末までの期間の三回である。

(32) 『イエズス会日本書翰集』原文編之二、一八四頁。
(33) 同右、訳文編之一(下)、七五頁。
(34) 同右、訳文編之一(上)、一九四頁。
(35) 同右、二三五頁。
(36) 同右、二二五頁。
(37) 同右、訳文編之一(下)、一二〇頁。
(38) 同右、一三三、一二二、一三一頁。
(39) 同右、一七六頁。
(40) 同右、一二三頁。
(41) 同右、一三三～一三四頁。
(42) 同右、一二三頁。
(43) 同右、一七七頁。
(44) 同右、一二三頁。
(45) 同右、一三一頁。
(46) 同右、一二二、一七七頁。
(47) 同右、一二四～一二六頁。
(48) 同右、一三一頁。
(49) 同右、一五二頁。
(50) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(上)、二三三頁。
(51) 同右、一(下)、一二四～一二五頁。

(52) 同右、一一一頁。
(53) 同右、一四七、一七二～一七三頁。
(54) 同右、二一頁。
(55) 同右、二二頁。
(56) 同右、一三〇～一三一頁。
(57) 同右、一七五頁。
(58)(59)(60) 同右、一八五～一八七頁。
(61) 同右、二一五頁。
(62) 同右、二二四頁～二二五頁。
(63) マドリー王立歴史学士院図書館 Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid 所蔵、Cortes 9—2663, f.135.
(64) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之二(上)(東京大学、一九九八年)、二一五頁。
(65) 同右、二一九～二二〇、二四六頁。
(66) 同右、原文編之二、二一八頁。
(67) 同右、訳文編之二(上)、三四～三七頁。
(68) 同右、七四頁。
(69) ゴア出発直前に入会したメンデス・ピントを含む。
(70) 『イエズス会日本書翰集』訳文編之二(上)、一〇九頁。
(71) 同右、五四頁。
(72) 同右、二四四頁。
(73) 同右、四五頁。

(74) 同右、二二〇～二二三頁。
(75) 同右、原文編之二、二〇三頁。
(76) 同右、訳文編之二(上)、二二九頁。
(77) 同右、二二七頁。原文編之二、二〇七頁。
(78) 同右、訳文編之二(上)、二三〇、二二五～二二八頁。
(79) 同右、原文編之二、二〇四頁。
(80) 同右、二二四頁。
(81) 同右、二二六、二三〇、二三八頁。
(82) 同右、二〇七、二二五頁。
(83) 同右、二二五～二二六頁。
(84) 同右、二〇七頁。
(85) HISTORIA DE JAPAM I, p.78.『日本史』6、一三二頁。
(86) 『イエズス会日本書翰集』原文編之二、二〇八頁。ローマ・イエズス会文書館所蔵の同時代の写本、アジュダ図書館所蔵の写本では、改宗者は一六〇人となる。
(87) 同右、二〇八～二〇九頁。
(88) 同右、二二九頁。
(89) HISTORIA DE JAPAM II, p.234.『日本史』7、五七頁。
(90) 『イエズス会日本書翰集』原文編之二、二三三～二三六、二〇五頁。
(91) 同右、二三九頁。
(92) Joseph Wicki, DOCUMENTA INDICA 4. Romae, 1956. p.847.

(93)(94)　『イエズス会日本書翰集』原文編之二、二一二～二一三頁。

(95)　同右、二三一頁。

(96)　一五五八年一月十日付書翰(Cartas do Japão, Evora, 1598, f.50.　村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上(雄松堂書店、一九六八年)、一六一頁。

(97)　五野井隆史『日本キリスト教史』(吉川弘文館、一九九〇年)、五四～五五頁。

(98)　Biblioteca da Ajuda, 49－Ⅳ－50, f.522v.

(99)　『イエズス会日本書翰集』原文編之二、二八九～二九〇頁。

(100)　アルメイダの一五五九年十一月二十日付、豊後発信の書翰(Jap. Sin., 4, ff.105－105v.)。

(101)　ibid. f.105.　『イエズス会士日本通信』上、一八九頁。

(102)　Josef F.Schütte, MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I. Textus Catalogorum Japoniae 1549－1654. Romae, 1975. P.557. H・チースリク『キリシタン時代の邦人司祭』(キリシタン文化研究会、一九八一年)、四三五頁。

(103)　『ペトロ岐部カスイ　資料集』(大分県教育委員会、一九九五年)、二〇八頁。

(104)　『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(下)、一六七頁。

(105)　同右、訳文編之一(上)、一二八頁。

(106)　同右、訳文編之一(下)、一六六～一六七頁。

(107)　一五五二年一月二十九日付、コーチン発信の書翰(『イエズス会日本書翰集』訳文編之一(下)、一一五頁)。

本稿は、一九九九年十月三十日に開催された、ザビエル渡来四五〇年記念事業実行委員会主催による『ザビエル渡来四五〇年記念講演会』における講演の原稿を整理したものである。若干の誤りを訂正し文体も「いる」「である」調に統一した。